

平成29年度 都市経済常任委員会行政視察報告について

委員長 田代和誠
副委員長 古賀敏彦
委員 佐々木益雄
委員 松村京子
委員 佐藤尚武
委員 田中登志雄

- 視察日：平成29年10月25日（水）
- 視察先：沖縄県西原町
- 視察内容：「農業と観光の拠点施設」
- 視察内容

沖縄県西原町は、那覇市の東側に位置し、人口35,096人、面積15.90平方キロメートルのまちで、産業は、稲作中心からキビ作、亜熱帯果樹栽培、花卉（かき）栽培へと変化し、昭和40年代以降は、各種産業が進出して商工業も盛んになり、今では県内有数の工業集積率、出荷額を誇っています。今回の農水産物流通・加工・環境拠点施設整備事業の農業と観光の拠点施設の整備視察は、施設自体はまだ建設中のため視察していませんが、実行までのプロセスなど重要点を絞り調査してまいりました。目玉とする取り組み、特に他の施設との差別化について、今回の施設は直売所のための単一機能ではなく、農水産物・加工品流通施設、地域食材提供施設、特産物加工、食育研修、地域文化学習、地域情報提供、体験交流など多機能複合施設であり、調査段階でも他の施設に真似できない要素を盛り込み、集客の高さを求め特徴を見出すために協議を重ねられていました。①食生活の見直しと健康との結びつけ。②古くからの伝統野菜に注目し、供給体制の整備とブランド化を図る。③既存の農家と連携して農業体験メニューを企画し、集客に繋げる。以上の三点に力を入れられていました。観光と農業のにぎわいに向けた取り組みにつきましては、地域食材を生かした特産品や料理を町内外の利用者や観光客に提供することは元より、当該拠点施設の地域文化学習・地域情報提供施設で、地域文化等の魅力を紹介するとともに屋根付きのイベント広場で地域芸能祭や物産展を開催し、賑わいと交流を図れる仕組みと既存農家との連携で、農作物の収穫体験や収穫した食材を調理・食事できる体験メニューを企画し、農業者との交流も図るとのことでした。6次産業化の支援につきましては、チャレンジショップという珍しい取り組みをされており、独立開業を目指す方や、学生などが出店する場合の支援として出店場所を提供することとしており、中でも学生の出店や特産品開発に力を入れられており、高校生に若い段階からまちづくりに参加できる仕組みを創り、成功体験をさせることで郷土愛に繋げる、このまちをどうにかしたいという情熱のもと職員の方々も多くの時間を費やしていました。

- 視察日：平成 29 年 10 月 26 日（木）
- 視察先：沖縄県本部町
- 視察内容：「農業振興と観光によるまちおこし」
- 視察内容

沖縄県本部町と小郡市、本部町商工会青年部とみい青年会議所の4団体は11月26日に「友好のまち」協定を締結いたしました。産業、観光、教育、災害時の協力など幅広い分野での交流が予測される中で、締結をする前に担当の分野である、農業振興や観光など今後の可能性を現地にて直に感じるため、また、事前の議員研修で、本部町より株式会社アセローラフレッシュ取締役の並里康次郎様を小郡市にお招きし、本部町の特産品であるアセローラの生い立ちから、6次産業の成功事例とアセローラを活かしたまちづくり、それに伴う様々な行政支援について学習をしていましたので、視察先に決定しました。

沖縄県本部町は、沖縄県北西部に位置し、沖縄の本土復帰後、昭和50年（1975）に、沖縄国際海洋博覧会会場となり国内外からの観客で活況を呈したまちで、これを契機として道路、港湾、公共施設等、社会資本の整備が着々と進められ、さらにその本土復帰から30年後には国による北部振興事業が推進されることとなり現代に至っているところです。町内にちゅら海水族館を有し、年間400万人が観光に訪れる本部町ですが、これまで物産の直売所がなかったため、本年度より物産の「もとぶかりゆし市場」を開設し、観光協会も併設して、観光客の取り込みに力をいれていました。また農産物の収穫体験や様々な祭りを各団体と連携して観光客の多い土曜日、日曜日に行うことで大きな効果を出していました。6次産業化に向けた農業・経営支援と産官学連携についてと「アセローラの日」制定までの経緯とその後の連携・支援について、行政が農家さんの情熱により動かされるまでの流れや、町民全体に町の特産品だと位置づける取り組みとして、「アセローラの日」の制定、町民全体がアセローラを食し、収穫祭を行うなど定着に向けた様々な支援や仕掛けを行政がコーディネーター役として商工会や大手民間企業など様々な団体と繋げ相乗効果を出していました。